

野上清子全集

第十三卷

岩波書店

野上彌生子全集 第十三卷

第二十二回配本(全二十三卷)

一九八二年三月五日 発行

定価 三三〇〇円

著 者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・二五・四二
振替 東京六三〇四

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

秀吉と利休……………	三
------------	---

後記……………	四五
---------	----

小
說
十三

秀吉と利休

堺の家では、朝寝も利休には愉しみのひとつであつた。とりわけその日は、まへの夜おそく帰りついたくたびれもあり、晩春の熱量のました太陽が軒のすかし窓を通し、部屋障子のひと枠、ひと枠を黄じろく染めるまで、おもひきり寝ばうをした。

それもきまりで、起きると朝湯の用意ができてゐる。

土地らしい潮湯のむし風呂である。粗らいすきまのある床の下から吹きあがる潮の香の強い湯気は、まあたらしい筵を通して、浴槽いっぱいにもうもうとたち籠めてゐる。狭い戸は、大男で七十に近づきながら骨格、肉づきに衰へのない利休には窮屈すぎても、なにか蹶り口をはいるやうな身のこなしで上手にもぐりこむ。はおつた麻の浴衣は洗布でもあつた。冬でもないかぎり長くはいつてゐないが、からだはたんねんにこすり廻す。熱した塩分の浸透は、肢体から関節のふしぶしまで鞣めし、なほまた湯気でねつとりした皮膚に、板敷の大だらひの水をざぶざぶ浴びる爽快さはいひやうがなかつた。

ぬぎ捨てた浴衣よくいとつゐのもう一枚が、隅の籠にはいつてゐる。利休は濡れたはだか身にひっかけ、今度はそれで全身を拭きとつてから、極楽、極楽、といひつつ向ふ側の仕きり戸をあける。鏡台や衣桁のおかれた小部屋で、着がへを膝において待つのは後妻のりきであつた。

「昨夜とは、うつてかはつたお色つやになりました。」

「たつがたつまで、片時も暇なしでね。」

「そんなにお忙しくては、おからだにいかがでせう。」

「御用だからな。」

聚楽第内に住むやうになつてからは、朝湯はおろか、利休は床にもゆつくりはしてゐられなかつた。秀吉は時刻かまはず現はれた。場合では前触れもない。虚をついてやらうとする意地わるもひそむが、大事な話をおもひつくと、待てしばしのない性急さで、密談には都合よい茶室をえらばうとする。利休が三千石の茶頭にとどまらず、政治むきのごとまで関白の相談相手であるのは、遠国の大名たちにもで知れわたつてゐた。

とにかく、いつなん時とびこまれてもよい準備を怠るまいとしたので、利休屋敷はあたりの家々にくらべてはことさら朝が早く、利休自らにもおきぬけの仕事が多かつた。

禅においては師、茶道では弟子格、また堺いらいの無二の友である大徳寺の古溪和尚が筆をふるつた、「不審花開今日春」の墨蹟から不審庵と呼ばれ、それが屋敷の名にまでなつてゐる四畳半と、いまひとつ三畳台目の茶室は、清掃からしつらへに人手をかけさせなかつた。わけてもゆるがせにしない火入れは、炉、風炉を問はず、その日その日の照り、曇り、季節によつてかはる湿めり、乾き、風のあるなしで、交へる粒灰の分量から木炭かざりまで日毎にかへた。七十に近づいて皺ばみ、油つ気もない手が寒いあひだは婢女のやうに荒れてゐる。またその手は、大男といへるからだに似て大きく

骨太でありながら、ひとたび点茶の座につくと、別なものになつていひやうもなく華奢に動く。茶室の掃除も点前も別事ではなかつた。とはいへ、毎朝の雑仕もひとしく茶道の精進として純粹につつましく行つたらうか。さうであり、さうでもなかつた。彼の意識の底にはつねに秀吉があつた。いつ姿を見せようと、待つてゐたやうな迎へ方がしたく、相談事なら、ちやうど予期してゐたやうな受け答へがしたく、茶室に通るなり、ここで朝飯を喰はうか、といひだされても、一向にまごつくまいとしたのである。気分次第で、秀吉はだしぬけにそんなことをいふ。またかうした場合は、わざと藤吉郎時代の尾張訛りをむきだしにして親愛の表現にするが、その調子に乗つてはならず、こちらは常にまして慇懃に振舞はなければならない。

利休が堺に戻るのは、これらの生活からの逃避でもあつた。ことに今度は半月まへの後陽成天皇行幸につづいて、盛儀に列するために上京した諸大名のため、聚樂第ではたえず茶事が催され、明けくれ氣の休まることがなかつたから、家居でしばらく寛ろぎたかつたのである。

町家のことまちやで、一方は土蔵になる細長い庭には日光がみち、女竹の茂みが、白壁にそうてほとんど黒くけざやかに浮きあがつてゐる。低い四つ目垣のしをり戸を押して裏へまはれば、茶室の露地にでる。利休は湯あがりの、太い爪の目だつ素足で廊下に佇んだまま、苔の青い飛び石のひとつひとつを、向ふの隅の、竹簀の子に蔽はれた古い井戸までじゅんじゅんに数へるやうな眺め方をした。そばに一本あつて、冬の花を寂しくつけるわびすけによつて、それは椿の井戸と呼ばれてゐる。いつたいに水質の粗らい堺の土地にしては、めづらしくよい水で、二丈近くも深い底から汲みあげるのにちよつと

手際がいるにしろ、利休には天与の賜物であるのはいふまでもない。

「七夕の井戸浚へには、ついでに井桁もとりかへるか。」

方型の厚い木組みの角々が水さびで青ずみ、なかはもう空洞らしく潰れかけてゐるのに最後の視線をとめた彼は、さう独り言につぶやいたのみで庭にはおらず、離室のはうから水屋をぬけて茶室にはいつた。

二畳台目の席としては、ここがはじめての工夫であつただけに、くぬぎの歪み柱一本にも彼には思ひいだが深い。蹠り口の内側の半畳、その北の、これも半畳とのさかひですでに炉に代つておかれた風炉の口は、火のみだれ過ぎないやうに土器かはらけでふさがれ、名残りの香のかすかな匂ひのなかに、あられ釜がほんの一きれ足す木炭を待ち、いまにも鳴りはじめようとする一瞬まへの静けさで、ひっそりとかかつてゐる。灰の拵へもおもしろいに違ひない。床掛けは伝宗汝志の淡彩の牡丹で、ほんの小幅ながら、利休がもつとも愛してゐる唐画の一つであつた。

利休は道具畳をぬけ、待合からつくばひまで眼をくばつてから、りきが朝餉の用意をととのへてゐる座敷に戻つて来た。彼はなにより先きにきいた。

「今日のしつらへは御前か。」

「紀三郎でございます。」

りきは末子で、生きぬなかの長男紹安、また後妻にはいる時連れ子にした次男少庵、そのほかに三人ある娘のあとに生んだ末子の名前をあげたついでに、今朝早く出入りの頭梁が、浜河岸の納屋の修

理の話でやつて来て、紀三郎もいつしよに現場に出掛けたむねを伝へながら、

「そんなわけで氣忙^{きばは}しさうにいたしてをりましたから、不行届^{きど}きなことでございましたせう。」

「紀三郎が本氣にやれば、兄たちに劣らぬものになれるのだがな。」

「それがあの通りですから、いつたい、どんなつもりなのか、あのこのことだけは、私も手のつけやうがございません。」

利休とは年齢も二十あまりのひらきがあるのみではない。華奢に小柄で、藍地小紋の袷に、はやりのびろうどの襦袢の襟をのぞかせた、いつまでも若女房めいて匂やかなりきの頬が、ふと雲のかげが落ちたやうに曇るのはこの息子の話がでる時であつた。

でも、そのことには利休はもう触れようとせず、箱膳の蓋をあけた。一人分の食器のをさまる黒塗りの古びた器具は、若い時からのものである。家に帰つてゐるあひだはいまだに用ゐてをり、それもふるなじみの大ぶりの飯椀と、象牙の箸を自らとりだすと、りきはこぶだしで味よくこさへた粥を土鍋からよそつた。朝はこの粥に時の野菜の煮ものが一皿、それに漬物ときまつてゐた。

「浜河岸の手入れも、そろそろ片附くふうかの。」

「さあ、いかがでございませう。納屋も古いほうは土台からの取りかへだと申しますから。」

「とすれば、まだ当分は仕あがるまい。」

「それにこの節は大工、左官も大阪のはうへまゐりたがつて、使ひにくくて困まると頭梁がこぼしてをります。」

「ふむ。」

利休は熱い粥をゆつくり食べた。

堺の浜は、大和川の河口から南へかけてまっすぐに伸びた海岸であつても、古くはちぬの海なる大
阪湾のひろびろした水の袋の一部だから、波はしづかだぶだぶと青い。向ふ側の四国、中国、九州
路からはもとより、紀淡海峡の早い潮をきつて、伊勢、尾張の船まできそひ集まるあひだに、舳艫を
派手やかに彩色した唐の大船^{もろこし}まで出入りした。しかし、倭寇の跋扈やその他の縄れで、宋、明との直
接取引きがとだえ、それに代つた南蛮船を、ばてれんといつしよに九州のキリシタン大名が膝もとに
抱へこむやうになつてからは、博多、長崎がこの古い開港地の繁栄をおびやかした。とはいへ、紅毛
碧眼の商人がつんで来る生糸、絹、綾、緞子、びろうど、毛皮、宝玉、紫檀、黒檀、なほさまざま
珍しい食べものといった奢侈品から、いまの合戦にはなくてはならない鉄砲の弾丸になる鉛、硝石の
軍需品の売込み、またもつとも利潤の大きい買ひものとする銀をはじめ、漆器、その他の雑貨の集散
では、堺は京、上方をひかへた地の利もあり、なほ安南、ルスンも瀬戸内の氣でゐた商魂を容易に失
ひはしなかつた。

南蛮船がキリシタン大名の港に来るのは、年に一、二度にすぎない。その時にそなへて買ひあつめ、
また彼らから買ひこんだ物資の保管には、安全な設備をもたなければならず、必要は、内地の諸国を
相手の商売にもかはりはなかつた。それ故、堺の町の富商たちは、いはゆる納屋衆の名で呼ばれる倉
庫業をいとなんでゐる。海岸ぞひにそれぞれの店の名前、屋号を高い破風の下に紋章ふうに大きく書

いた土蔵が、ふつうにはまだ板葺きが一般なのに、そこだけはおもしろく瓦屋根でならんでゐるのは、彼らの富の標識でもあつた。たえない入り船、出船、あるひはひと仕事終つたかつかうで帆をおろし、むきだしの帆柱を、なにか冬木立のやうに林立させた親船、そのあひだをはしつこい腕白児のやうに漕ぎまはる伝馬、荷役の仲仕と船頭の叫びあふ胴間ごゑ。これらの粗らい動的な水上の殷賑は、倉庫の白壁の列や、青く光る波との交錯において、古い貿易都市の貫禄をまだ活き活きと示すのである。

利休も納屋衆の一人で、家業は魚屋であつた。でも、堺の目貫きにならぶ魚棚の商人とはちがひ、網元をかねた塩物問屋だから浜の倉庫の大切さは貿易商に劣りはない。ただ品物が品物で、彼らのやうな派手な儲けは望まれず、なほ大阪の築城からは新しい町に押へられがちで、りがが噂する大工、左官どころではなく、一尾の魚でも大阪のほうが値がでるから、古い関係の漁船まで堺を素通りしかねなかつた。しかし先代ほどにはことがいかないのは、それだけの事情ではない。いまの彼は、魚問屋の主人よりは秀吉の茶頭であり、そのうへ、顧問役にひとしかつた。後妻のりきは利発な女で、金春流の能役者の家に生まれただけに、謡、小舞のたしなみはもとより、茶の湯も夫とともに京に住むあひだは、大政所、北政所のないないの稽古に御相手をするほどに堪能ながら、家のなりはひに采配のふれる質には遠かつた。

長男の紹安、次男の少庵はともに茶人となつてゐる。それに紹安は、父と同じく茶頭として五百石を食みながら、リユウマチ性の足の痛みが持病で、いまでも有馬の湯に出養生をしてゐるありさまだか

ら、家業をつがせるとすれば、紀三郎よりほかにはない。ところでよい男前で、利かぬ気のあたまの鋭い十八の若者は、帳場におちつくつもりはなさうに見えた。また父や兄たちの茶は、わび数奇よりいささか物好きだ、と憎まれ口をきいたりする癖に、点茶の座につかせれば、いつこれほどの腕になつたかと感嘆させないではおかない。母の兄で、それも能役者の鳥飼弥兵衛は紀三郎の容貌と声柄に目をつけ、いつそ、自分たちの道にはいる気はないか、芸も叩きこみ次第で、いまからでも立派なものに仕あげてやらう、と誘ふが、それくらゐなら隆達節をやる、といつてのけ、居間にしてゐる裏座敷のほの暗い壁にもたれながら、堺にはじまつてこのごろは京、大阪まで流行^{はや}つてゐる意気な小唄を、聴きおぼえとは思はれない巧みさで低唱する。今日とても普請場からまつすぐに歸つて来るか、どうか、わかつたものではなかつた。久しぶりに家にある父への手前をおもひ、出しなに釘をさしておいたのではあるが、むしろ、紀三郎は父を避けるために、わざと普請場へ行つてしまつたのであらう。この一二年、めだつて扱ひにくくなつたのみでなく、五十近くでえた子供だけに情愛もいつそう深い父に対して、こと毎にそつぽを向く傾向がつるのを、りきは母親の勘で見のがさなかつた。幸ひに利休は、紀三郎がちよつとした言葉に示す反抗も、いつそ隔てのない甘えか、若いころのやり場のない突つかかりとしかおもつてゐないやうに見えた。

「あれにも、そろそろ身をかためさせたはうがよい。」

最後の一口は湯漬けにして、箸をおくといつしよに、なに気ない風にさういひだした夫を、りきはおはぐろの艶々とした前歯を淡あかい唇にのぞかせて見あげた。彼もほかのことは考へてゐなかつた

らしい。

「その気になつてくれれば、安心なのですけれど。」

「どこかにいひ交した女でもあるふうかの。」

「べつにそんな様子はございませんやうで、鳥飼の兄などは、かへつていけないことを申すくらゐですわ。」

「どういひなさる。」

「紀三郎はつまらない相手にうつつ抜かす男ぢやないから、当分好きなやうにさせておけ。思ひきり遊ばしたはうが、彼奴はもつとからりとなるなんて。」

利休はまだ肉のおちない艶のいい頬のいつばうで、ほろ苦くわらつた。義兄は彼らしい治療法をいふのである。

金春流の先代の家元喜勝の弟子であつたのが奈良から流れて来たかたちで堺に移り、とにかく、いつぱしの能役者の地位をこさへあげるまでの弥兵衛の若盛りには、この道の修行ではなによりの禁制たる好色、博奕、大酒のうち、第二の誠しめは別として、あとのものへの惑溺は誰にもひけはとらなかつたのだから。でも、利休はそれをいひださうとはしなかつた。りきが下婢を呼び、いつしよに膳をさげて部屋を去つたあとも、もとの座を動かさなかつた。かたちのよい大きな坊主あたまに似あつた、二瞼目のまるい大きな眼を、どこを見るとはなく眇めるやうにして、厚い唇を左寄りにくひしめてゐる。考へごとをする場合の癖である。利休は十八の紀三郎をおもひ、またその年ごろの義兄の放縦な